

《1. 研究報告》

助成年度 Grant Year	2023
研究テーマ Research Title	都市再生におけるリビング・ヘリテージ保全の社会福祉的効果とその影響メカニズムに関する研究
研究代表者 Representative	孫 淑亭
代表者所属機関 Organization	東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻、都市デザイン研究室
職名・課程名 Position/Program	博士後期課程

①研究概要

研究の背景、目的・リサーチクエスチョン、学術的重要性、対象について記述してください。

1. 研究の背景

1.1 理論的背景：遺産保護に対する国際的なアプローチは、物質中心からリビング・ヘリテージアプローチへと変化しつつある。

物質中心・価値中心アプローチは、長い間開発され、成熟した理論体系を有しているが、多様性、文脈依存性、保全の決定におけるコミュニティの役割など、いくつかの問題にはまだうまく対処できていない(表1) 1。リビング・ヘリテージとは、歴史の中で様々な作者によって創られ、現在も利用されている場所、伝統、慣習のこと、またはその中あるいは近くにコアコミュニティが住んでいる遺産のことを指す。リビング・ヘリテージのアプローチは人を中心とすることを重視し、人と自然が生み出す相互作用の継続を含め、コア・コミュニティによる遺産のステewardシップと保全に重点を置いている2。

1.2 実践的矛盾：都市再生におけるリビング・ヘリテージ・アプローチは、多くの課題に直面している。

現在のリビング・ヘリテージアプローチの理論では、リビング・ヘリテージであるかどうかを判断するために、遺産の4つの連続性を重視している。すなわち、遺跡の本来の機能の連続性、コミュニティと遺跡との関わりの連続性、コミュニティによる遺跡の伝統的管理の連続性、そして遺産の進化する有形・無形の表現の連続性である。現在、歴史的な町や街並みなど、伝統的な住民が居住する遺産は、一般的にリビング・ヘリテージとして扱われているが、都市人口の頻繁な移動により、そのコア・コミュニティを定義することは難しく、連続性は既存のリビング・ヘリテージアプローチの枠組みには当てはまらない。同時に、ネオリベラル経済体制の下で、人、資本、生産物の自由な空間移動が、現代都市の「時空間圧縮」(Time-space compression)をもたらし3、都市再生後の景観が均質化し、遺産保存の利益と個々の住民の利益とのバランスの問題が生じている。

1.3 国際的な進展：リビング・ヘリテージの長期的な社会的・空間的効果は議論されていない。

ここ10年、リビング・ヘリテージ保存をキーワードとした研究が国内外で徐々に増え、無形要素から物質的要素へと議論が広がってきた。議論の焦点は、歴史的な地域における遺産的価値と日常的価値の優先順位付けにある。農業時代からの伝統が多く、木造建築の更新が常に必要なアジアでは、リビング・ヘリテージの実践に関心が集まっている。2003年から2008年のICCORM(文化財保存修復研究国際センター)リビング・ヘリテージプロジェクトでは、リビング・ヘリテージ保護が継続的な管理施策であるため、5年ではリビング・ヘリテージ保護の長期実績を示すには不十分である。一方、日本では、地域保全に基づく町作りの名のもとにリビング・ヘリテージ保全が50年近く行われてきたが、言語の制約もあり、日本の実践経験が国際的に解剖され、現在の研究の焦点であるリビング・ヘリテージ保全の成果とメカニズムが示されるには至っていない。

¹ Poullos, Ioannis. The Past in the Present: a Living Heritage Approach - Meteora, Greece. Ubiquity Press, 2014. <http://www.jstor.org/stable/j.ctv3s8tpq>.

² ICCROM. People-Centred Approaches to the Conservation of Cultural Heritage: Living Heritage.

³ Harvey D. The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change. Cambridge and Oxford: Blackwell, 1989.

2. 目的・リサーチクエスト

2.1 広範な社会問題の文脈からリビング・ヘリテージ保全の道筋を探る。

本研究は、現在の市場経済下における都市空間再構築の中でリビング・ヘリテージの問題を位置づけ、歴史的環境と地域コミュニティの相互関係を人文的視点から分析する。遺産保護を社会の調和と包摂を促進し、社会的対立を緩和し、社会的活力を喚起する都市戦略とするために、都市におけるリビング・ヘリテージアプローチの実現への道筋を探ることを目的とする。都市におけるリビング・ヘリテージの理論的枠組みを構築し、マイクロ・スケールでのコミュニティ調査を実施することで、人間的配慮を反映し、社会的ニーズに応え、コミュニティの健全な発展に資するような歴史的市街地の再生と保存のための参考となる分析を提供することを目指している。

2.2 都市の文脈におけるリビング・ヘリテージアプローチの有効性を、主体の視点と他者の視点の両方から総合的に探る。

本研究は、物質的・経済的表象や他者から見た建築空間に焦点を当てたこれまでの遺産管理評価研究から脱却し、学際的な研究アプローチを採用する。人文地理学や環境心理学の場所論を用い、様々なタイプの関係人口の地域アイデンティティの構築を含め、コミュニティ主体の視点から、リビング・ヘリテージの管理手法が人間と場所の関係に与える影響を探る。

2.3 リビング・ヘリテージ・アプローチの実施効果に影響を与えるメカニズムを探り、コミュニティの幸福度を基準として、都市空間再構成の価値バイアスを修正する。

ネオリベラルな都市化の中で、大規模な旧市街地の再生や商業再開発事業は、歴史的景観の物理的な再構築を伴うだけでなく、人地関係や地域社会構造の劇的な変化を引き起こす。そこで本研究では、リビング・ヘリテージ保全の影響メカニズムを都市への権利の観点から分析し、住民生活の現状、住民のニーズ、旧市街地再生の活動が地域社会の既存の生活に及ぼす物質的・非物質的な影響について詳細に検討することで、地域住民が最も関心を寄せる現実の利益と権利の争点に向き合う。

3. 学術的重要性

3.1. 理論的意義

(1) 都市リビング・ヘリテージの理論的枠組みの補完

既存の研究は宗教遺産に焦点を当てることが多く、都市遺産の体系的な理論が不足している。本研究は、都市の文脈で適用可能な PCA の管理手法と影響メカニズムを探求し、都市再生に活用できる実践的アプローチを提示する。

(2) 社会調査要素の補完

遺産保全研究は、価値評価や保存技術に偏り、住民視点の研究が不足している。本研究では、社会調査を活用した PCA の実証的分析を行い、地域福祉を考慮した遺産保全の新たな視点を提供する。

3.2 実用的意義

(1) 調査対象が代表的な事例であることは、日中間の遺産保存手法の相互交流に貢献する。

本研究の事例は、中国と日本における都市リビング・ヘリテージの代表例であり、政策・コミュニティ自治・遺産保護の革新的手法を含む。両国の社会経済・文化的背景の違いを比較し、相互学習の機会を提供する。

(2) 将来の過疎地の地域再生に貢献する。

内子町の研究を通じ、場所愛着の形成と住民関係の影響要素を明確化。特に、関係人口の流入と地域の社会的紐帯の確立が、過疎化や高齢化の解決策となる可能性を示す。

3.3 社会的意義

(1) 中国や日本に代表される東アジアにおけるリビング・ヘリテージのローカライゼーションは、西洋の「権威づけられた遺産言説」を打ち破ることにつながる。

西洋主導の「権威づけられた遺産言説」に対し、東アジアの地域主導型保全モデルの重要性を明らかにし、国際的な遺産管理における多文化的視点の強化に寄与する。

(2) 世界的な観点から見ると、都市におけるリビング・ヘリテージとそのコミュニティの問題は、世界の都市持続可能な発展のための必要条件である。

ユネスコの「歴史的都市景観に関する勧告」に基づき、都市の居住性向上や社会的多様性の維持を重視。PCA を通じて、物理的・精神的・社会的次元を統合した遺産管理の新たなビジョンを確立し、地域アイデンティティや社会的紐帯の強化を目指す。

4. 研究の対象

4.1 遺産保存パラダイムの変遷

世界の遺産管理の分野において、「Living Heritage Approach (リビング・ヘリテージ・アプローチ)」が国際的な遺産管理システムの中で次第に「People-Centered Approach (PCA、人間中心のアプローチ)」へと発展していることは広く認識され、多様な実践的手法が形成されつつある。しかし、PCA を実施する際には各国や地域間で著しい差異が生じている。PCA が異なるガバナンスモデルの下でどのような特徴を示し、どのように運用されているのかを深く理解するため、本研究では国や地域を横断的に比較し、以下の基準に基づいて研究事例を選定した。

4.2 グローバルな事例分析とモデル分類

本研究はまず、世界の遺産管理体系における PCA の形成、異文化間での適応、政策主導の言説の確立、実践的な運用という側面から考察を行った。特に ICCROM による国際的な普及、中国における政策的転換、日本における地域主導のモデルなど、計 50 か所の遺産地のデータを分析した。

(1) 国際

ICCROM は PCA の国際的な普及を主導し、東南アジアを中心に文化マッピングや技術支援を通じてコミュニティの主体性を強化してきた (ICCROM, 2005)。2015~2017 年には 20 か所の遺産地管理者を招いた研修プログラムを実施し、PCA の実践課題と政策への影響を明らかにした。

(2) 中国

中国では、遺産管理が「モノ中心」から「人間中心」へと転換し、都市更新や遺産保護でコミュニティの共同創造が推進されている (Li Ji & Fu Houwei, 2023)。しかし、政府主導が依然として強く、コミュニティの意思決定権は政策によって制約されている (Li, 2020)。本研究では、国家歴史文化名城に指定された 17 都市の中から代表的な事例を選び、政府主導型 PCA の適応と制度化の実態を検討した。

(3) 日本

日本では、地域特性を生かしたコミュニティ主導の遺産管理が発展している。特に「町並みまちづくり」(50 年)、「地方活性化」(30 年)、「歴史まちづくり」(20 年) といった政策を通じ、自治・行政支援・文化産業の統合が進められている (Nishimura, 1997 ; 国土交通省, 2024)。本研究では、日本政府の「歴史的風致維持向上計画」や「地方再生モデル都市」に基づき、長期的な地域主導型 PCA の実践事例を分析した。

4.3 調査事例の選択

以上の分析を踏まえて、以下の3つの典型的なモデルが明確になった。これらを事例代表性、理論的関連性、実践的な実現可能性という3つの観点から検討した結果、本研究では最終的に中国の平遥古城、タイのプレー（Phrae）、日本の内子町を典型的な事例として選定した。それぞれは次のようなモデルを代表している：

- 政府共治モデル：中国・平遥古城
- コミュニティ自治モデル：タイ・プレー（Phrae）
- 文化経済統合モデル：日本・内子町

項目	探索的ケーススタディ（Exploratory Case Study） 都市遺産管理における PCA 実施の障壁を比較ケース 研究から明らかにする		模範的ケーススタディ （Exemplary Case Study） 強化されたフレームワーク とメカニズム分析の構築
遺産形成	公式な共同生産モデル （政府共治型）	非公式なボトムアップモデル （地域自治型）	公式・非公式混合モデル （文化経済統合型）
対象	平遥古城（中国）	プレー（Phrae、タイ）	内子町（日本）
人口	20,000 人	16,000 人	16,000 人
選定理由	<ul style="list-style-type: none"> • 中国で最も早期にリビングヘリテージアプローチを導入した世界遺産都市 • 票号（銀行草創期の金融業）文化産業 	<ul style="list-style-type: none"> • ICCROM リビングヘリテージパイロットサイトプログラム参加地 • 織物および染色産業 	<ul style="list-style-type: none"> • 探索的ケースとの類似性 • 蠟、和紙製造産業
PCA の関連性	<ul style="list-style-type: none"> • 2012 年より物中心から人中心への転換 • 外部専門家によるコミュニティエンパワーメント • 政府主導型 PCA を代表 	<ul style="list-style-type: none"> • 2003 年からリビングヘリテージアプローチを実施 • コミュニティ自らがエンパワーメントを実施 • 国際的な PCA モデルを代表 	<ul style="list-style-type: none"> • 1973 年より町並みまちづくりを実施 • コミュニティ主体のエンパワーメントと行政の支援 • 最新段階の PCA モデルを代表
画像			

表2 選択された事例の共通点

②研究の経過（研究課題1）

研究課題1について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題1：都市再生の文脈におけるリビング・ヘリテージの理論的枠組み

実施内容：

1. 研究の目的と方法

文献研究を通じて、リビング・ヘリテージの理論的起源や関連学術領域を整理。

ICCROMのアーカイブ調査を実施し、国際的なリビング・ヘリテージの適用実例を収集。

2. 実施内容

● 文献研究と理論的整理

- 遺産保存学におけるリビング・ヘリテージ研究の分析。
- 人文地理学・政治経済学の視点から、都市空間における人地関係の理論を整理。
- 都市再生におけるコミュニティの構成要素、遺産価値、居住価値、都市資産価値の関係を分析し、場所愛着の環境心理学的アプローチを検討。

● ICCROM（国際文化財保存修復研究センター）でのアーカイブ調査

- 「リビング・ヘリテージ・サイト・プログラム（LHP）」および「リビング・ヘリテージ・アプローチ（LHA）」に関する一次資料の収集。
- 2002年～2024年に実施されたICCROMのプロジェクト報告書やハンドブックの分析。
- ICCROMのフェロシップ・プログラムに参加し、ローマで3ヶ月間のアーカイブ調査を実施。

3. 研究成果

- 都市におけるリビング・ヘリテージの新たな理論的枠組みを提案。
- 従来の遺産保存パラダイムとの比較を通じて、リビング・ヘリテージの概念的進化を明確化。
- 理論的考察と実証的アーカイブ調査の両面から、都市遺産のコア・コミュニティの定義を再検討。

本課題の成果は、都市遺産保全の理論的発展に貢献するとともに、実務的な遺産保護・都市再生の政策立案にも示唆を与えるものである。

②研究の経過（研究課題2）

研究課題2について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題2：中国と日本における都市リビング・ヘリテージ・アプローチの効果評価

実施内容：

本課題では、**People-Centered Approach (PCA)**の適用モデルとその社会空間的影響を検討し、遺産価値に対する地域住民の認識変化や、人と場所の関係の変遷を分析した。

1. 研究の目的と方法

- PCAの国際的適用状況を整理し、中国と日本の代表的事例を比較。
- 3つの都市事例（中国・平遥、日本・内子町、タイ・Phrae）を対象に、都市遺産のPCA適用モデルを分析。

2. フィールド調査の実施

- 文献・アーカイブ調査（都市遺産政策、政府報告書、関連研究）

- 半構造化インタビュー（計 77 件）（行政関係者、専門家、住民、事業者）
- アンケート調査（内子町）（490 部配布、162 件有効回答）

3. 研究成果

- PCA の 3 つの適用モデル（政府共治・コミュニティ自治・文化経済統合）を明確化
- 地方都市における PCA の適用可能性を検証
- 研究成果の発表（Q1・Q2 ジャーナルに論文 3 本投稿、1 本採択・2 本査読中）

本研究の知見は、都市遺産管理の政策立案や地域主体の遺産保全モデルの強化に貢献するものである。

②研究の経過（研究課題 3）

研究課題 3 について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題 3：都市におけるリビング・ヘリテージの実施効果に影響を与えるメカニズムの比較研究

実施内容：

本課題では、中国と日本の都市再生のコンテキストにおけるリビング・ヘリテージ保存のメカニズムの共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

1. 研究の目的と方法

- 都市景観遺産保護法や都市再生計画の歴史と構成を分析し、政策的枠組みを整理。
- 土地経済、市場変動、資本循環などの経済的要因を考察。
- 伝統文化の認知、コミュニティ構造、社会的要因を定量・定性的に分析し、PCA の影響メカニズムを比較。

2. 実施内容

1. 政策・経済・歴史・社会的要因の分析

- 政策的側面：都市景観遺産保護法・都市再生計画の歴史と制度設計の比較。
- 経済的側面：都市経済システム、土地市場の変化、資本循環の分析。
- 歴史的側面：伝統文化の継承状況、コミュニティ構造の変遷。
- 社会的側面：教育水準、都市の権利構造、住民参加の度合いを評価。

2. 定量的情報収集・分析

- 過去の都市遺産保存政策文書、都市再生計画、経済データ、土地管理データを収集・分析。
- PCA の影響メカニズムを定量的に検証し、中国・日本における異同を明確化。
- コミュニティ認識の定性分析を行い、定量分析の結果を補完。

3. 比較研究の実施

- 中国と日本の影響要因を比較し、各要因の改善可能性を分析。
- 政策の実効性、経済的持続性、コミュニティの適応度を評価し、リビング・ヘリテージ保存の最適なモデルを検討。

3. 研究成果

- 中国と日本における都市再生の PCA 適用メカニズムを明確化。
- リビング・ヘリテージの社会・経済・政策的影響の異同を体系的に整理。
- 都市遺産保全における政策的・経済的改善の可能性を示唆。

本研究の成果は、都市遺産管理の戦略策定に寄与し、異なる都市文脈に応じた PCA 適用の最適解を提供するものである。

②研究の経過（研究課題 4）

研究課題 4 について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題 4：都市におけるリビング・ヘリテージの実施手法の再構築と計画ガイドラインの策定

実施内容：

本課題では、都市におけるリビング・ヘリテージを持続可能に保全・活用するための**デザイン・ガイドライン、政策指針、技術的ツールの策定**を目的とし、関係者のアイデンティティ意識の向上と、都市開発と遺産保全の利害調整の方法を検討する。

1. 研究の目的と方法

- 都市リビング・ヘリテージの概念整理と判断基準の再構築。
- 遺産保全と都市開発の矛盾点を整理し、調整メカニズムを検討。
- 具体的な戦略（価値定義・実施経路・コミュニティエンパワーメント）を提案。
- 内子町をパイロットケースとし、社会実践を通じた適用可能性の検証。

2. 実施内容

1. 都市リビング・ヘリテージの概念整理と矛盾点の分析

- リビング・ヘリテージの定義、構成要素、価値評価基準を体系化。
- 都市開発との対立点（観光開発・資本流入・人口減少地域の課題）を分析。

2. 都市リビング・ヘリテージの実施戦略の提案

- **ガイドライン策定の枠組み**：都市遺産の価値評価方法、継続的な住民参加の仕組み実施可能な経路とステップの明確化。
- **政策指針**：法制度と都市計画との連携、地域のステークホルダー間の調整方策
- **コミュニティエンパワーメントの手法**：
 - 地域住民の意思決定プロセスの強化
 - 若年層の参加促進

3. 内子町におけるパイロット社会実践

- **森家住宅の活用プロジェクト**を通じた歴史的風致の継承と新たな用途開発。
- **内子高校生ビジネスコンペ**を活用し、若年層の地域づくり参画を促進。
- **東京大学都市デザイン研究室のプロジェクト**と連携し、地域と共に都市遺産の持続可能な活用方法を検討。

3. 研究成果

- 都市リビング・ヘリテージの実施指針と計画ガイドラインの策定。
- 政策・空間デザイン・住民参加の三位一体の戦略モデルの提案。
- 内子町をモデルとした実証実験を通じ、リビング・ヘリテージの実装プロセスを明確化。

本研究の成果は、都市遺産保全と都市再生の統合的アプローチを示し、全国の歴史都市・地域に適用可能な実践的ガイドラインとして活用されることが期待される。

③ 成果・期待される波及効果等

研究を実施して得られた成果および期待できる波及効果について記述してください。

1. 都市遺産管理の政策策定への貢献

- PCA の適用モデルとその課題を明確化し、各国の遺産管理政策への応用可能性を示すとともに、住民の生活福祉向上に資する政策設計の視点を提供した。
- 特に地方都市において、社会的包摂や地域福祉の視点を取り入れた PCA の持続可能な実施方法に関する知見を提示。

2. 地域社会におけるコミュニティエンパワーメントの促進

- 地域住民の遺産意識の向上に加え、行政・専門家・市民の協働を通じた社会的連帯の形成や、地域福祉の基盤強化に寄与する枠組みを提示。
- 遺産活用を通じた共助的な地域づくりと、生活の質の向上に資する方策の検討に貢献。

3. 国際的な遺産管理アプローチへの示唆

- LHA から PCA への転換プロセスを整理し、国際遺産管理における「人間の福祉と尊厳の向上」を重視する新たな方向性を提起。
- 特に ICCROM など国際機関が推進する「包摂的で人間中心の遺産政策」との連携を強化。

4. 実践モデルの提示と横展開の可能性

- 本研究で提案した PCA の 3 つのモデル（政府共治・コミュニティ自治・文化経済統合）は、地域住民の生活向上や福祉の視点を内包するフレームワークとして、他地域への適用が可能。
- 内子町のパイロット実践を通じて、社会的つながりの再構築や、地域福祉の担い手育成につながる知見と実証データを提供。

④ 成果物

本研究について発表した論文、刊行物、シンポジウム等の情報を記載してください。

参照 URL がある場合はそれを含めてください。

学術誌論文：

1. 孫淑亭、中島直人, *Exploring People-Centred Approaches in the Intersections of Planning History and Heritage Studies: The Case of Phrae, Thailand* [J]. *The Historic Environment: Policy & Practice*, 16(2), 318–344. (SCIE&AHCI Q1)
2. 孫淑亭、Rohit Jigyasu、中島直人, *Navigating discourses and local practices: the People-Centred Approach in urban heritage practice* [J]. *Built Heritage*, 採択済(掲載待ち)。 (CSCD Cite Score Q1)
3. 孫淑亭、永野真義、青木公隆、中島直人, 日本地方都市における非典型遺産の保護とコミュニティデザイン——群馬県水上町を事例として (中国語) [J]. *国際都市計画*, 採択済(掲載待ち)。 (CSSCI, CSCD)
4. 孫淑亭、青木信夫、中島直人, *Theoretical and Practical Boundaries of the People-Centred Approach in Urban Heritage Practice: A Critical Analysis Based on the Interaction between Discourse and Extra-Discursive Factors* [J]. *International Journal of Heritage Studies*, 査読中。 (SSCI Q1)
5. 孫淑亭、岡田潤、中島直人, *Heritage Making in Uchiko Town: A Social-Spatial Analysis within the People-Centred Approach* [J]. *Journal of Urban Science*, 査読中。 (SSCI Q1)

6. 孫淑亭、岡田潤、中島直人, *Evaluation of the Effect of People-Centered Approach Implementation on Place Attachment in Urban Heritage Management: A Case Study of Uchiko Town [J]. Humanities & Social Sciences Communications*, 査読中。(SSCI Q1)
7. 孫淑亭、岡田潤、中島直人, *Implementation Pathways and Mechanisms of the People-Centered Approach in Urban Heritage Based on Community Design: A Case Study of Uchiko Town [J]. Habitat International*, 査読中。(SSCI Q1)

学会発表：

1. 孫淑亭、中島直人, 「リビング・ヘリテージから人間中心アプローチへ：遺産管理手法の変遷に関するレビュー」. *Linking Culture and Nature: ICCROM-BFU 2024 Conference on Heritage and Landscape Conservation*, 北京, 2024年10月19日～21日.
2. 孫淑亭、中島直人, 「リビング・ハビタット・ヘリテージ保全の社会空間的効果とそのメカニズム：タイ・プレーの事例」. Ian Morley and Hendrik Tieben (eds.), *International Planning History Society Proceedings, 20th IPHS Conference, "The (High Density) Metropolis and Region in Planning History," TU Delft Open*, 香港, 2024年7月2日～5日。(EI収録)
3. 孫淑亭、永野真義、青木公隆、中島直人, 「ポスト・マスツーリズム時代の日本地方観光地再生——産官学金連携による外生型コミュニティ形成の研究」. 第七回建築人類学フォーラム「居住に適した都市と日常生活」, 上海, 2023年11月30日.
4. 孫淑亭、岡田潤、中島直人. 人間中心アプローチに関する話説の地域的展開：内子町における〈ヘリテージ・メイキング〉のプロセス分析. *日本都市計画論文集*, 査読中.

⑤写真

研究実施中の様子、成果物等の写真を掲載してください。(各写真にキャプションを付けてください。)

平遥調査およびインタビュー：



イタリア・ローマのICCROMでのアーカイブ調査：



内子調査およびインタビュー：



内子町森家住宅の活用：



内子町高校生ビジネスコンテスト：



タイ・プレー（Phrae）プロジェクト責任者とのオンラインインタビュー：

